

2014年度 第1回 入学試験問題

国 語

(50分)

<注 意>

1. 開始のチャイムがなるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 問題は1ページから38ページに印刷されています。
3. 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
4. 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

中 央 大 学 附 属 中 学 校

I

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

蜜蜂^{みつばち}という言葉から大方の人たちは何を連想するであろうか。蜂蜜^{みつ}というのとはともかくとして、花から花へと蜜^{みつ}を求めて忙^{いそ}しそうに飛び交^かう姿を思い浮かべる人がいちばん多^{おほ}かろうと想^{おも}う。小学校時代の理科の時間に、虫によって花粉^{はうかい}が媒介^{ばい}される植物を虫媒花^{ぶみけ}ということを教わり、訪花昆虫^{こうもんちゅう}の代表としての蜜蜂^{みつばち}を頭の中にたたきこまれたこと^aにキーンしているのかもしれない。

春五月初め、りんご、桃^{もも}、あんず、桜桃^{おうとう}の花が東北や信州では一斉^{いつせい}に咲^さきほこる。わずかに残雪をいただいた山々を背景にしたりんご園は美しい日本の自然の^bテンケイの一つではなからうか。

ここでもりんごの花の間を飛び交^かう虫たちということになれば万^{ばん}事^じめでたし、めでたしということになる。ところが、害虫防除がよくゆきわたったわが国の最近のりんご園では、花を訪れる虫の姿は^A目にとまるだけにすぎない。りんごの花が咲きはじめるこの季節は蜜蜂が活動するには少し気温が低すぎることもその理由の一つだが、それにしても訪花昆虫はいくら目をこらしてもなかなか見つからないというのはい体^いど^うした^{こと}なの^だ。

レイチェル・カーソン女史はあの有名な著書『Silent Spring^{サイレント スプリング} (沈黙の春)』によつて、鳥も鳴かぬ春と*DDTなどの有機塩素系殺虫剤^{どがい}の害を世論^{うた}に訴^うえて、アメリカの議会まで動かしたが、日本のりんご園はついに虫も飛び交^かわぬ春^{むか}を迎^{むか}えてしまったわけである。戦後の食糧難^{しきりょうなん}をきりぬけることができたのは、ビニール・^B化学肥料であるといわれている。中でも^Bは今までの栽培法^{さいばい}を一変^{いっぺん}させるほどの威力^{いりき}を示し、殺虫剤の弾幕^{だんまく}的な散布は、害虫も確かに殺したが、天敵も花粉を運ぶ虫たちも^C殺してしまつたのである。

虫のいないりんご園で花に受粉させるにはどうしたらよいか。それは人間が花粉を集めて花につけてまわるより仕方がない。だからこの時期になればりんご地帯の青森県などの学校は休みになって、学童たちも虫のかわりを務める。時には自衛隊員までが花に花粉をつけてまわるという仕儀^{しぎ}になる。人間が虫を殺して、虫のかわりを人間がする。^①これはまさに漫画^{まんが}である。

ともかく、②人間が花粉をつけてやれば虫の役目は果たせる、と思うのは実は浅はかでそう簡単なものではない。花が一斉に咲くとよくいうけれども、実際にはきちんと咲く順番があつて、いちばん先端についている蕾、つまり花房のいちばん中心のところから咲きはじめる。いちばんおいしい実がなるのはこの中心花である。虫は咲いてくる花を次から次へと訪れるから、中心花への受粉の役割を十分に果たし、やがて満開ともなるとさすがの虫も手が廻りかねてくる。このことが、いちばんよい実をたくさんつけ、しかも一本の木に実がなりすぎないという良い結果をもたらす。

人間がそうしたことをやろうとすると実に面倒である。だから咲きそろったところで一度に花粉をつける。中心花への受粉率を高めるためには、いきおいたくさんの花粉をばらまくことになる。というわけで、なりすぎた実は人間がまたもぎとって調節をはかる。なんとまた能率の悪いことか。

咲いたらすぐ受粉されるということにはもう一つ意味がある。りんごにはモニリヤ病という恐ろしい病気があるが、受精するところの病気にかかりにくい。蕾が開くとすぐさま虫が訪れることによって病気から自分自身を守るという自然の仕組みはなんとすばらしいではないか。こう考えてみると、人間はあまり効率のよくない虫くらいにはなんとかなれるということになるだろうか。

人間が虫のかわりなどする屈辱には耐えられないというならば、殺した虫をもう一度生き返らせるという方法に頼らざるを得ない。そこで東北や信州の篤農家では、試験場の成果をとり入れていろいろのことをしている。

春先からの働きもののマメコバチという、葦の筒の中に巣をつくる蜂のために、人間はちょうどよい太さの葦を吟味を重ねて集める。そのうえ巣が古くなると入りこんでくるダニの発生を防ぐために掃除したり、新しいものと更新したりしてやる。いわば清掃管理付きの蜂のマンションを建て、ひたすらお客様のおいでを乞うわけだが、お客様はかなり気ままに計画どおりに行かないことも間々ある。

もう一つは、虫を殖やして放してやるという方法がある。シマハナアブというアブを調合した餌で育てる技術がみ出され、たくさんさんの成虫をりんご園に放してやるわけである。

殺したり殖やしたり全く忙しい話である。

③このような奇妙な事態になったのは、強力な殺虫剤散布のためであることはもちろんだが、ここまで追い込んだ原因は、④ゾンガイ、現在農業汚染に目くじらを立てて怒っている一般消費者の側にもある。りんごが少しくらい形がゆがんでいようが、へこんでいようが、美味しく食べられればよいではないか。現在でもりんごには袋掛けが一部で行なわれ、次第に増加しているけれども、これは昔のように病気や害虫から守るためではなく、りんごに美しい色あいを出すためだけのものである。ところが、袋を枝にしばりつけたすき間が好きだというカイガラムシがそこに増える。だから農薬を散布することにもなってしまう。

消費者はそれほど馬鹿ではないと開きなおる人も多いと思う。しかし、こんな話がある。知人が婦人団体に招かれて農薬公害の話をしたときのことである。現在の農薬散布使用量を半分ほどに減らしても、味や大きさは変わらない。少し見ばえが悪いだけだと試食をしてもらった。その時はみな納得したような顔をしていたけれど、余ったりんごを帰りにお持ちくださいといったところ、農薬をたくさん散布した見ばえのよいほうからあつという間に無くなったというのである。④これは笑い話ではなくて本当の話である。

果樹害虫の研究の草わけといわれている松本鹿蔵さんに伺った話にこういうのがある。鳥取県の二十世紀は全国に有名だが、岡山県で栽培した二十世紀のほうがはるかに糖分も多くておいしかったのに、どうしても販路がなかった。太陽光線に恵まれた岡山県の梨は少しばかり色が濃かったためである。ちよつと健康的な色をしていたばかりに、透きとおったような肌をした鳥取県の梨にはとても⑤太刀打ちできなかったのである。

この日本人の目で食べる習慣はいつまでたつてもつのるばかりで、少々度を越している。少々虫がかじったあとが残っていてもよいではないか。買ったりんごの芯の中に虫がいたのが交じっていたからといって、⑥青筋たてることはないではないか。そういう虫がいても別に人間には一向毒ではない。むしろ虫食いりんごは美味しい場合さえある。そろそろ価値観をかえてもよい時期だと思ふ。消費者側のエゴは一応置くことにして、多量の農薬が使用されたことは事実である。散布した農薬の大部分は作物にかかるとほとんどの人が思っているが、実際にはそれは1割にも満たない。逆に大部分の農薬は土壌表面に、水田ならば水面に落下し、一部分

は空中に飛散する。土壤に吸着されたものもわずかずつ水に溶け出て川に入り、空中に飛散したものも雨水に混じって落下して川に入る。やがて川の水は海へと出て、こうして農業は次第に薄められていく。

「**D**」という言葉を広辞苑で引いてみると「過去のいざこざを打ちすてる」とある。もつとざつくばらんといえば御破算である。川に流せば水の手持っている浄化作用と希釈によってもとのものなど問題にするに値しない状態になるという意味であろう。こういうわけで、*PCBも水銀もみな海に流した。海は川よりも広いから、川に流す以上に安全だし、誰からも文句の筋合いはないと考えたところに実は最近の公害の根源がある。虫を殺して虫の役目を人間が果たさなければならぬように、棄てたと思ったものの、薄めたと思ったものが再び濃縮されてわれわれ人間のもとに還元されてきたにすぎない。

水の中に棲む動物は有機塩素系の殺虫剤（DDTや*BHCなど）、PCB、水銀などを濃縮する速度が早い。水の中にわずかに溶けている酸素をエラというポンプをフル回転して呼吸しているからで、このごろようやく一般の人たちになじみの出てきた、食物連鎖など問題にならないほどのスピードがある。

魚に臭い餌を食べさせても、魚肉の部分はなかなか臭くならないが、水の中に溶かした異臭はたちまち体の中に取り入れられるのは、このエラ呼吸のせいである。こうして釣つても食べられない異臭魚がでかあがるのである。

もはや、辞書改訂に際しては、**D**という言葉は現代では云々と悪事の数々をならべたてた一項をつけ加えねばなるまい。

⑦今日のように、人間自身が生物の一員であることを忘れて、次から次へと身勝手なことをしていくと、どうにも歯止めがなくなってしまう。魚も野菜も果物も汚染、ミルクも母乳もさまざまな物質で汚されているとなると、この先人間は一体どうなるのであろうか。

⑧人間が生きのびるには少なくとも二つの方法がありそうだ。一つは、現在地球上で人間が我物顔でのさばってきた要因、すなわち科学技術の動員による方法である。たとえば、魚をとつたらミキサーにかけ、これをさまざまな化学的手法によって水銀やPCB、あるいは殺虫剤などあらゆる有害物質を取り除き、安全と思われる成分だけを成型機にかけて形をととのえてこれを食べるのである。

銅焼のもう少し手のこんだものだと思えばよい。まぐろの刺身も、大とろは大とろ、中とろは中とろと多少製造するに際しては気を配りゼリーで固めたようなものを④シヨウミする。このようにして目で食べるといふ気分も満足させる。これも面倒ならば、⑤シヨウホウ箋にしたがつて合成食品をつくるという、現在行なっている家畜飼育法をさらに改良した方法をとるのである。

もつとも、これらの過程で生じる有害物質の問題は新たに生じるから、まさに⑨いたちごつこの様相を呈し、景色は全て窓越しに眺めるといふことになる。果ては汚れた窓外の景色はそれほど魅力的な景観でもないからと古い記録に基づいたものを立体テレビでということにもなるうか。

もう一つの方法は有害物質に対して抵抗性を持った人間を選抜してゆく方法である。大脳ばかり大きくなって、動物としての正常な進化を遂げていないこの裸の猿は、文字どおり悪い環境の中にほっぽり出されれば、最初の環境というふるいの目によってたばたと倒れるであろう。やがて、これに耐えるホモ・サピエンスの変種を生じ、ついに新しい種類の生物が出てくるかもしれない。そして、この人間らしき新しい生物は、ゴキブリと共にヘド口にも負けず永遠に生きのびることになるのであるうか。

*DDT……殺虫剤の一つ。残留毒性があり、日本では一九七一年に使用禁止となった。

*PCB……ポリ塩化ビフェニル。廃棄してもほとんど分解されず、特に魚介類を通しての人体への蓄積が有害。日本では一九七二年に製造・使用とも禁止となった。

*BHC……強力な殺虫剤の一つ。残留性が高く、蓄積による慢性の毒性が問題化し、日本では一九七一年に製造・使用とも禁止となった。

【問1】 ①a～eのカタカナを漢字に改めなさい（楷書でていねいに書くこと）。

- ①a キイン ②b テンケイ ③c ゾンガイ ④d シヨウミ ⑤e シヨホウ

【問2】 A・C に当てはまる語を次の中から選び、それぞれ（ア）～（ク）の記号で答えなさい。

- （ア） ぼんやりと （イ） もろともに （ウ） おずおずと （エ） さつそうと
（オ） ほそぼそと （カ） おおげさに （キ） ちらほらと （ク） すみやかに

【問3】 B に当てはまる語を、漢字2字で答えなさい。

【問4】 ①「これはまさに漫画である」とありますが、その説明としてもっとも適当なものを次の中から選び、（ア）～（エ）の記号で答えなさい。

- （ア） 虫の世界を支配したつもりが実は虫に支配されているという現実気づいていない愚劣な人間界を批判している。
（イ） 虫の代わりに真剣に花に花粉をつけてまわらなければならぬ人間のすがたやしぐさの滑稽さをあざ笑っている。
（ウ） 虫の代わりを学童に務めさせるための休校措置を平然と取り入れている地域社会の慣習をばかにして笑っている。
（エ） 虫たちを殺しておきながら、その代わりを自ら引き受けなければならぬ人間のおろかさを皮肉っている。

【問5】 ②「人間が花粉をつけてやれば虫の役目は果たせる、と思うのは実は浅はかでそう簡単なものではない」とありますが、どうしてですか。その理由説明としてもっとも適当なものを次の中から選び、（ア）～（エ）の記号で答えなさい。

- （ア） 自然界のシステムは巧みにできており、人間がそれを操作しようとすること自体が思いついた考えであるから。

- （イ） 自然界の一つひとつの営みは進む速さが違っており、人間がその違いに合わせて動くことは事実上不可能だから。
（ウ） 自然界の花と虫との組み合わせはきわめて多様であり、人間がそれらを全て認識することは到底無理であるから。
（エ） 自然界の力は想像以上に大きいものであり、人間がそこに立ち入っていくとしても、手にあまってしまうから。

【問6】 ③「このような奇妙な事態」とありますが、具体的にはどういうことを指していますか。次の中から適当なものを2つ選び、（ア）～（カ）の記号で答えなさい。

- （ア） いったん殺した虫を再び生き返らせること。
（イ） 人間と虫とが共存できる建物をたてること。
（ウ） 虫の来訪をひたすら待ちつづけていること。
（エ） 人間ががまんしつつ虫の代わりをすること。
（オ） 手間ひまかけたうえで虫を放してやること。
（カ） 蜂を殖やすために別の虫を飼い育てること。

【問7】

——④「これは笑い話ではなくて本当の話である」とありますが、どういうことを「笑い話」と言っているのですか。もっとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 農薬やそれがもたらした公害について関心のある人たちでも、色合いや形のよい、農薬にまみれたりんごを選びとってしまうということ。

(イ) 理性的な判断をすれば減農薬のりんごを選ぶ女性たちも、土産みやげになるとと体裁ていさいを気にして、見ばえのよいのを選んでしまうということ。

(ウ) 知識人のする生真面目きまじめなデータに基づいた話は、一般大衆いっばんの疑い深い体質や素朴そぼくな感覚の前では、しばしばむだに終わってしまうということ。

(エ) 農薬公害の事実から何かを学び取った人たちでも、農薬を散布されたりんごでそうでないものとの区別がつけられないようにはないということ。

【問8】

——⑤「太刀打ちたちできなかった」、——⑥「青筋たてる」、——⑨「いちちごっこ」とありますが、⑤「太刀打ちできない」、⑥「青筋(を)たてる」、⑨「いちちごっこ」の意味として適当なものをそれぞれ選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

⑤「太刀打ちできない」

(ア) 勝負することから逃にげてしまうさま。

(イ) 互角ごかくに張り合うことができないさま。

(ウ) 相手の力量をまったく認めないさま。

(エ) 競技や戦いなどが開始されないさま。

⑥「青筋(を)たてる」

(ア) 根拠こんきょもないのに相手を非難すること。

(イ) 血の気が引いて気持ち悪くなること。

(ウ) 血管が浮き出るほど真剣しんけんになること。

(エ) 激はげしく怒いかったり興奮したりすること。

⑨「いちちごっこ」

(ア) 互いに同じことをくり返すばかりで、きりがないこと。

(イ) 予想もしなかったことが事実となって現れ、おびえること。

(ウ) 二つの存在がだまし合いをして、両者とも先が見えなくなること。

(エ) 思いがけないことが次々に起こり、何がなんだか分からなくなること。

【問9】

D に当てはまる慣用句を4文字で答えなさい。

⑦「今日のように、人間自身が生物の一員であることを忘れて、次から次へと身勝手なことをしていくと、どうにも歯止めがなくなってしまう」とありますが、これに関する次の説明文を読んで、後の問いに答えなさい。

二十億年におよぶ生命の歴史のなかで、人間を含むあらゆる生物は環境^{かんきやう}＝自然との関わり合いのなかで生き、進化してきました。もとより、その自然はあるがままにそこにあります。自然自体の中には、善も悪もありません。

人間は、しかし、a に対して害をおよぼすものを「悪」と呼び、徹底的に排除^{はいじょ}しようとしてきました。b に対して直接または間接に害を与える虫が「害虫」と呼ばれ、有害無益の存在と考えられ撲滅^{はくめつ}の対象とされてきたのも、その一端です。

もちろん、戦うこと自体はそれこそ自然ですから、人間と害虫との闘争^{とうそう}も、この世に生きる無数の生物間の闘争の一つの形態にすぎないと考えることも可能でしょう。けれども、c そのものがd の存在を前提にしていると、いう大前提に立ち返って考えてみるならば、害虫もまたどこかでe の役に立っているはずなのです。いわば善悪・害益^{ひやくり}が表裏一体となっている存在としての害虫が根絶やしにされるべきいわれはなかったと言わなければならないのです。

にもかかわらず人間は、害虫という害虫の全種族の撲滅に向かおうとするようなふるまいを続けてきました。それはもう自然に対する反逆でしかありません。その姿は、(1)

- (ア) 自分たちこそは全生物の頂点に立ち得ると考えて、
- (イ) 自分たちの価値体系を自然全体に押しつけて、巨
- (ウ) 自分たちだけが生きるに値^{あた}すると妄信^{もうしん}し、他を顧

大自然を制圧する独裁者になろうとしている
 大なる自然の管理者に成り上がろうとしている
 見ない利己主義者への道を歩もうとしている

ようにも見えます。このままいけば、完全に嫌われ者となり、自然か

ら総スカンを食らうことになるでしょう。

だとすれば、人間は今こそ、自然という宿主^{おんけい}の恩恵^{おんけい}によって暮らし生きる寄生者^{きせいしや}に戻るに越したことはありません。おごり高ぶったまま生き、宿主のありとあらゆるものを奪^{うば}い破壊^{はかい}し続け、結果的に宿主を殺してしまつては、自分も死なざるをえないからです。(2)

- (エ) 宿主は寄生者を排除^{はいじょ}することもある
- (オ) 寄生者は宿主を変えることはできない
- (カ) 宿主は自らの宿を自ら捨てることがある

という一点に、あらためて気づ

かねばなりません。そのうえで、このあたりで毒素^{どくすう}の排出^{はいしゅつ}をやめないと、ほんとうに元も子もなくなってしまうかもしれないのです。

(一) a e には、「人間」と「自然」のいずれかの語が入ります。「人間」が当てはまる場合には「ア」を、「自然」が当てはまる場合には「イ」を、それぞれ解答らんに記しなさい。

(二) (1) (2) について適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

【問11】

⑧「人間が生きのびるには少なくとも二つの方法がありそうだとありますが、筆者は(一)これまでと同様にひたすら科学技術に依存して有害物質を排除した食品を作っていく方法と、(二)あらゆる有害物質に耐えられる人間を創っていく方法という「二つの方法」をあげています。(一)と(二)それぞれの「方法」がもたらす結果として適当なものを次の中から選び、(ア)～(カ)の記号で答えなさい。

- (ア) 人間は「見た目」で食べることに飽きるのではないか
- (イ) 人間は有害物質から目をそむけるだけになるのではないか
- (ウ) 人間の食料は家畜が食べるような粗末なものになるのではないか
- (エ) 人間は人間とは言えない生物として生きていくことになるのではないか
- (オ) 人間は外界との接触がなくなりテレビばかり見るような生活を送るのではないか
- (カ) 人間はさらにずる賢くなり悪知恵を身につけて生物としては退化していくのではないか

【問12】

本文の内容として適当なものを次の中から2つ選び、(ア)～(キ)の記号で答えなさい。

- (ア) 人工的にりんごを受粉させる場合は、中心花への受粉率を高める目的で大量の花粉をまくのだが、そのために一本の木に実が成りすぎるという良くない結果が生じてしまう。
- (イ) りんごにはモニリヤ病という病気があるが、花が咲き、虫が訪れ、その虫が分泌する体液を花が受けとめることで、りんごはこの病気にはかかりにくくなると考えられている。
- (ウ) りんごに袋掛けをする農家の数は今や増加しているが、りんごに袋を掛けるのは、りんごに美しい色合いを出すためではなく、りんごを病気や害虫から守るためなのである。
- (エ) 鳥取県で栽培された二十世紀は、岡山県で栽培された二十世紀より糖分も水分も多く美味しいのだが、色が少しば

かり薄いために、なかなか販路が広がらなかったのである。

- (オ) 農薬を大量に散布した場合でも、作物にかかる農薬の量はその二割にも満たないのであって、残りのほとんどは土壌に吸着されたり、人体に吸収されたりしているのである。

- (カ) 人間はPCBや水銀を海の水が希釈してくれると考えて海に廃棄したのだが、実際に計測してみると、確かに川の水よりも海の水のほうが有害成分を薄めていたのであった。

- (キ) 魚に臭い餌を食べさせても魚肉がすぐに臭くなるわけではないが、エラ呼吸によって臭い水が体内に取り込まれると、臭い身を持った異臭魚ができあがってしまうのである。

II

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

家の中には、昨日焼いたクッキーの、バニラ・エッセンスの匂いがまだ漂っていた。
 久しぶりに取り出した《スポック博士の育児書》を本棚の一番上の段に戻すと、彼女は洗面台で手を洗い、^①鏡にむかつて鼻をピクピク動かしてみた。鼻だけを動かすのはむずかしい、顔全体が引きつってしまう、ということを確かめてから、長男シミジミの部屋へ入って行った。

母親によく似た丸顔の十一歳の少年は、ベッドで本を読んでいた。

「もっと明るいところで読みなさい。また《メタル・メタフィジック》読んでるの」

「メタルじゃないよ。メチル。《メチル・メタフィジック》」

「だってそれSFでしょ。SFってメタリックな感じがするけど」

「古い。ロボットSF時代の人」

「物理的と化学的の違いかしら。物的と雰囲氣的の違いかな。どういう意味かしら。本精形而上学……」

「あっちへ行って、一人でゆっくり悩んでよ」

それは、ヒトが《社会的人間》になる前の原始の混沌のようにも、あるいは《人間社会》が崩壊してしまった後の廃墟のようにも見える野原で、一人一人胞衣に包まれた裸のヒトが浮遊している漫画であった。

話している間、彼女はずっと少年の鼻を見ていた。鼻は動かなかった。

「お母さん買物に行ってくるけれど、何か必要なものはない」

「サッカーの短パン忘れないで」

今度は彼女は、体形を確認するように少年を見た。最近急に大きくなった彼は、新しく買って帰ったTシャツやGパンが合わない

ことがある。この一年間に身長は八センチ伸び、体重は七キロ増え、視力は〇・三落ちた。

「なんだよ、ジロジロ見るなよな」

突然少年は低い声で言うと、黒眼を右に寄せ、蒼白く光るナイフ眼で母親を睨んだ。このごろ彼はしばしば、そうした急な変化で彼女を驚かせる。

と、また急に、黒眼を解散して言った。

「なーんてね、劇団ひまわり」

②「むずかしい年頃の少年め」

少年の髪に手をつつこんでモジャモジャにかき乱してやろうと、彼女が腕を伸ばすと、彼は素早く身をひき、ハッシと彼女の手首を両掌で受けとめた。

「真剣白刃取り」

母親と少年は軽くジャブの応酬をした。

「行ってくるわね。なるべく外で遊びなさい」

「あとで三班Aのメンバーが来るんだ。おたのしみ会の相談と準備」

母親が部屋から出て行くと、少年は勉強机とは別の、自分で白いパネルに脚を取り付けて組み立てた坐り机にむかつて、ノートを開いた。彼の部屋には、図鑑、釣り道具、ケン玉、紙飛行機、サッカーボール、傘、三角定規、ヤクルトスワローズの野球帽などが散乱しているが、^③白い坐り机の上だけは、きちんと整頓されていた。ペン皿、カッターナイフ、ケント紙、黒インク、ホワイトのポスターカラー。自分で割箸を削って作った、とくべつな味の線の描ける何本かのペン。

④ノートの表紙には、《少年都市》と書いてあった。

見開きの第二頁と第三頁には、都市計画の鳥瞰図が描いてある。第二頁の方は、中央の少年宮から放射状に道路が広がった、コンパスや分度器を使って描いたような設計図である。第三頁の図は一見、樹の枝のように、曲りくねった大通りや細道が複雑に交叉して、森や川や穴ぼこがある。どちらにも建築物などは記入されていない。彼はまた⑤都市計画案として、どちらを採用するか決定を下していなかった。

だが本篇の劇画は着々と進行していた。コマ割りの上方三分の一ほどのところに横線一本、地平線を背景にして、核戦争後の生き残りの少年たちが、新しい都市を建設しようとする物語である。

その劇画には、オトナが一人だけ登場する。姓はムヒョー、名はジョーという。雲水坊主めいた風貌の「ムヒョー・ジョー氏」は、常に正面向き半眼の一定表情で、少年たちの感動の場面にアップで登場し、「ムム……」と言う。ジョー氏はそれ以外の言葉をしゃべらない。

少年はノートから数日かかってケント紙に清書した廃墟の部分に、瓦礫の感触を出すため、砂粒のような模様のスクリーン・トン用紙を選んで原画の上に置き、針の先で輪郭をたどって切った。そして原画とずれないように合わせ、父親によく似た長い指の爪の裏で擦って貼りこんだ。裏に薄く糊のひかれた半透明の膜に、斜線や点々などの地紋が刷りこまれたスクリーン・トーンは、父親の仕事場からもらってきたものである。

少年はその作業をしながら時々、鼻をピクピク、ピクピクと動かした。

彼女が買物袋に財布を入れて庭に出ると、自転車が出た。七台並んでいた。

「チャリンコは置いて行こうぜ」

と、次男ホトホトの同級生たちが置いて行ったものである。子供が乗るにしては、高価そうな黒いスポーツ自転車ばかり。中に二台、買物カゴの付いた白い女乗りの二十二インチ自転車がある。

「僕と森君だけだぜ、ママハン・ライダーは」

母親と共用で半分ずつ乗るからママハンなのだそう。それに乗って行ってしまったら、もし彼らが帰ってきて、またどこかへ行く場合、ホトホトは徒歩で行かなければならない。彼女が徒歩で行くことにした。

スーパーマーケットへ行く、暗渠の上の遊歩道の桜並木は、すっかり葉が落ちていた。

彼女は敷石の線を踏まないように歩いてみた。「スポック博士の育児書」で「チック」の項を調べた時、それに関連して一つ前に「強迫」の項があり、舗道の線を踏まないように歩いたり、垣根の杭を二本目ごとにちよつとさわって歩く子供のことが、書いてあったからである。

少年が鼻をピクピクする癖は、「チック」の項に当てはまるようだった。彼女は二週間ほど前にそれに気づいた。

「鼻をピクピクするのをやめて」

途端に、たてつづけに三度、四秒おきほどにピクピクと動いた。

「無意識なんだよ。言われるとかえって動いちゃうよ」

以来そのことは言わないようにしているが、まだ治らない。あまり動かさない時と、頻りに動かす時があるようだが、どういう時にどうなのか、それとなく見てもわからなかった。

*

《チック（スポック博士の育児書より）

チックというのは、まばたきをしたり、肩をすくめたり、顔をしかめたり、首を曲げたり、せきばらいをしたり、鼻をすすったり、空セキをしたりといった、神経質なクセのことです。このチックは、「強迫」とおなじように、九歳ころにおこるのがふつうですが、二歳すぎでもう始まることもいます。

その動きは、ふつう、かなり早いもので、一定の間隔を置いておなじことがくり返されますが、緊張すると、もっと頻繁になります。

す。そして、一つのクセが、何週間か、何カ月かつづいていたかとおもうと、いつの間にか治ってしまうこともあるし、また別のクセが始まることもあります。まばたき、鼻すすり、のどをクンクンならすクセ、空セキといったことは、風邪をひいた時におこることが多く、風邪がなおったあとも、クセだけが残るのです。肩をすくめるクセは、体に合わない大きい服を着せられて、ずり落ちそうに感じる時などに、始まることがあります。

また、ほかの子をまねているうちに、自分のクセになってしまいうこともあります。 A、もともとそういった傾向のない子が、友だちからうつたりすることは、まずないでしょう。

チックは、両親がきびしくて、たえず神経を張りつめているようなこどもに多いのです。家での圧迫感が強すぎるせいでしょう。こどもさえみれば、お母さんやお父さんが、うるさく指図をしたり、たしなめたりすると、こどもが耐えきれなくなることも多いし、直接口には出さなくても、こどもにたえず不満を感じていたり、無理な期待をかけすぎたり、 B、ダンスや音楽や運動のけいこが、こどもの負担になっているのかもしれない。

C、こんな圧迫感も、自分からはねのけるような強さをもった子なら、内攻する心配はまずないのですが、やかましくしつけられたこどもは、そのイライラする気持をおさえてしまうことが多いので、その結果がチックとなって現われるのです。

こんなクセが現われたときは、叱ったり、無理になおそうとしてはいけません。やめようにも、本人にはどうしようもないものだからです。一番いい方法は、家では出来るだけ小言をいわないで、のんびりと、朗らかな気持にしておくこと、また、学校生活や、友だちとのつき合いなども、こどもが心から満足できるようにしむけてやることです。

チックは、舞蹈病とはまったく違うもので、セカセカと落ちつきがないのとも別です》

*

チックだけではない。このところ毎晩あの子たちは夕食後、お風呂の前後から寝るまでの間に一悶着を起こしている、と彼女は頭の中の日めくり事件簿をめくった。オリオンの三つ星の左、ペテルギウスの赤星が瞬きながら、向いの家の椎の樹の上から物干し台

の上に回る頃が、問題の時間であった。

最近、兄弟は毎晩ささいなことではけんかしている。月曜日は「匂い頭事件」である。頭がクサイと弟に言われて怒った兄は、二時間以上も風呂場から出てこなかった。夜の十時半過ぎによく風呂からあがった長男は、タオルをひたたくって自室へ入ったのである。火曜日は「靴下作戦騒動」である。次男は、兄弟共用のハイソックスのうち新しいハイソックスを足首に結んで寝ようとした。それを見た長男が「ずるいぞ」と言い、とつくみあいの大ゲンカとなったのである。水曜日には、次男が母親に様々な心配事を伝えてきた。ビー玉やドンダリをのんだことについて、人間の運命について、友だちの盲腸について等々、次男にとってはすべてが心配の種となっているのである。木曜日は「ネジ男騒動」である。家中のネジが気になった次男は、鏡、ライト、スタンド等々のネジを抜いたり、壊したりした。その様子を見た母親が次男を「ネジ男」と呼んでしまったために、次男はすねてしまう。家ではこうした騒動が毎晩続いているのである。

ドアを閉めておいても、トリの唐揚げの匂いが流れこんでくる。 ⑥ このごろ母親は、少年たちの好きな揚げ物料理ばかり作っている。魚の煮付けや、ほうれん草のごま和えなどは、ほとんど食卓に出なくなった。

白い机を押入れの中からもとの場所に戻した少年は、描いた画面の細部を点検すると、一番細い筆の先に、ポスターカラーのホワイトをつけ、輪郭から墨のはみ出した箇所をていねいに修整した。

傍らには弟が、我慢している福助の置物のように控えている。動いたりすると、兄のナイフ眼で睨まれる。机に触れたりしなくても、「空気が動く」と怒られるのである。

弟は〈少年都市〉の中に、最年少の味噌ツ子（小丸）として登場する。彼は〈死んだお母さん〉の幻を慕いつづけ、母親の形見の

洋服のボタンをいつもいじっている。時々、そのボタンを失くして泣き、年上の少年たちを困らせる。もちろんこころやさしい少年たちは全員で、コンタクトレンズを捜すように、ボタン探しをしてあげる、という設定である。

少年は筆を置くと、修整しおえたケント紙を、柱から柱に渡した紐に通したクリップに止めて吊した。兄と弟の間に撒かれてあつた気分的な撒きビシが消えた時、忍者ホトホト小丸は、声をひそめて言った。

⑦「お兄ちゃん、あのこと、何かいいアイデア思いついた」

「あのことか」少年は鼻をピクピク動かした。「こんなのどうかな」

少年は脅迫者の声色を使って、次のように言った。

「もしもし、俺はミスターX。今、君の会社の前に立っている。

「もしもし、俺はミスターX。今、エレベーターで君のところへ行くところだ。

「もしもし、俺はミスターX。今、君のドアの前に立っている。

「もしもし、俺はミスターX。今、君の後に立っている。ふりむいて見たまえ。

「そうやって、毎晩夜中に一回ずつ、お父さんのカイシヤに電話をかけるんだよ。そうすれば、恐くなって帰ってくるんじゃないか」

「……………」

「お前、泣いてるのか。泣くなよ。冗談だよ。お兄ちゃんまで泣きそうになるじゃないか」

*

「電灯は明日の昼間取り付けてあげるわね。今夜はもう見えないから」

夕食の片付けをすませた母親が炬燵に入り、タバコの封を切ると、二人の少年はいつものようにへおねがいタバコ」の儀式をした。銀紙を開いたばかりの口から一本抜き出し、白いフィルターの頭を並べているタバコたちの中に、一本だけ茶色い葉煙草の切口を見せて逆さに戻す。そして立てた箱にむかつて合掌した。

「タバコさん、タバコさん、モゴモゴモゴモゴ、願いをかなえてください」

「この一本は最後に喫ってね。途中で喫うと、願いがかなわないんだから」

モゴモゴの部分は、声に出さない彼らとへタバコさん」との秘密の会話で、人に言うとう願いがかなわないのだそう。彼女はいつも、つい忘れてへとくべつな一本」を途中で喫ってしまう。そのせいで、少年たちの願いはなかなかかなわない。

「お母さんもお祈りする。タバコさん、タバコさん、今夜は何も起きませんように。お願いかなえてください」

「声を出して言っちゃダメなんだよ」

昨夜は、この冬はじめて出した炬燵を囲んで坐ったせい、何も起らなかった。

静かといえば静かな夜だったのである。

風が強く、時々、枯葉が窓を打った。外は大砂塵ではないが、少年たちの父親は、帰ってきた時が帰ってくる時の西部劇の男、現代のゴールドハンター広告マン。彼らがカイシヤと呼ぶ父親の仕事を援護するため、母親は税金計算の電卓を叩いていた。シミジミ少年は鼻をピクピクさせながら、新しいペンを作るための割箸を削り、ホトホト少年はプラモデルを作っていた。

「今、門が開く音がしたんじゃない」と弟。

D

「ふつうんちは九時でも遅い方なんだって。僕びつくりしちゃった。でも社会科の〈働くおじさん〉のところで習った。夜まで仕事している人も沢山いるんだよね」

「そうだよ」

「僕、行けばよかった。僕行かないから、どんどん、どんどん、嫌われてるみたい」

「どうしてそう思うの」母親が聞いた。

「だって、お風呂も一緒にいらなくなったし、うるさいって言うようになったし」

「そんなことない。お父さんはちよつと疲れていたの。それに君は本当にうるさいもん」

「鼻をつままないでよ」

「君ほどかわいい子はいないよ。誰だってそう思ってる。お父さんはお仕事が忙しいから、九時には帰ってこれないけれど、いつものように、白い机にむかって、君たちのことを考えながらお仕事しているの」

「俺、風呂」

シミジミ少年がつと立って行った。

「お兄ちゃんは〈おもいで〉があるから、お父さんが好きなんだよ。外国へも連れて行ってもらったし。僕は〈おもいで〉がないから、つめたいの」

「誰がつめたいの」

「誰がつちゆうこともないけど、〈おもいで〉がつめたいの」

「君が三歳の時から、お父さんは一人でお仕事するようになって、忙しくなったからね。だからこうしてお母さんも、お仕事がいるの事にお父さんがわずらわされないように、お手伝いしているの。」^⑧でも思い出っというのは昔のことよ。お父さんは昔の人じゃないでしょう」

「帰ってきたのは前の週の火曜日だよ」

「よく覚えてるのね。オクサンみたい」

「お母さん、こんなこと言って申し訳ないんだけど」

「何ですか」

「タバコ喫ったり、Gパンはくのをやめて、森君のお母さんみたいに、女らしくしていた方がいいんじゃない」

「そうか。女らしい方がいいのね」

「うん、男の気持だよ」

「ふうん。おしえてくれて、ありがとう。男の気持のこと、よく知らなかった。お母さんはペーパーミント・パティみたいだもんね。ガラッパチの女の子」

「そういうわけじゃないけど、申し訳ない。僕は面白い女の子の方が〈好きなタイプ〉だからいいけど」

「コノコノ。さ、お風呂に入りなさい。お母さん、月曜日に会計士のところへ行かなくちゃならないから、これだけしてしまおうから」
シミジミ少年はお風呂から上ると、すぐ部屋に入ってしまった。一人がひっそりとしている時は、相手がいないから、もう一人も静かなのである。

彼女は電卓を叩きつづけた。テレックス（注：初期のデジタル通信方式）を打つように。

アナタニ トッテハ シゴト イガイノコトハ カテイモ コドモモ ザッヨウ ナノデショウカ。アナタハ カテイガ フチン
ノ コウクウボカン ダト オモッテ イルノデショウカ。ワタシハ ナンドモ アナタニ SOS シンゴウノ デンワラ シマシ
タ。コドモモ サビシガッテ イルシ ワタシモ カラダノ ハンブンガ トザサレテイル ミタイナ ヘンナキモチニ ナルカラ
シゴトガ イソガシクテモ ナルベク カエッテキテ。

SOS。キチヨリ ゼンセンニツグ。シキユウ キカンセヨ。SOS。キチヨリ ゼンセンニツグ。シキユウ キカンセヨ。
——オウトウナシ。

ワタシハ モウ アナタニ ヨビカケル コトモ シナクナリマシタ。アナタノ タテコモッタ オトコノシゴト トイウ ダイ
ガランガ ガランドウ ダト シッテシマッタ カラデス。
コノゴロ ワタシハ ユメ ミマス。ミギテニ シミジミ ノ チイサナ テ。ヒダリテニ モット チイサナ ホトホト ノ
テ。サンニン テ ヲ ツナイデ アルイテ ユク ジブンノ ウシロスガタ ヲ。
ナゼ ソウ シナイノカ。ソレハ コドモタチ ガ アナタ ヲ スキ ダカラデス。

*

そして土曜日の夜である。

⑨ またペテルギウスの赤い星が輝いている。

少年探偵団は推理していた。今夜はお願いがかなう。母親がトリの唐揚げのほかに、すり鉢でゴマをすっていたのがその証拠だ。それに今夜は土曜日だ、ということを考えないふりをしている少年が、ストーブの上にアルミ箔で包んだ芋をのせて、焼芋をつくつている。「ああ土曜日だったんだね、おかえりなさい」とその時はじめて気がつくつもりなのである。焼芋は四つ焼いている。

もう一人の少年は、僕、そんなこと関係ないもん、という顔をして、ピーズ玉を刺している。赤。とうめい。黄。オレンジ色。とうめいな赤。緑。とうめい。黄。赤。とうめい。とうめいな黄。オレンジ色。緑。黄。とうめいな赤。黄。

炬燵台の上に散らばったピーズ玉が、偽の星座をつくっている。母親はその星座に名をつけ、小さい方の少年におしえる。リボン座。長ぐつ座。オーストラリア座。もみじ座。ロケット座。

屋根に降りつも雪もない都会で、眠れない太郎次郎を眠らせるために、母親は偽の言葉の星をまぜて〈父座〉もつくった。赤。黄。とうめい。赤。おしごと。とうめいな赤。緑。黄。とうめい。赤。黄。いそがしいの。緑。黄。とうめいな赤。黄。オレンジ色。緑。白い机。黄。赤。とうめいな黄。緑。オレンジ色。

⑩ 赤い星は物干し台の上に回って、雲の中にかくれた。

「おやすみ」「おやすみなさい」

少年たちは自分たちの部屋へ引きあげて行った。兄は小さな声で弟を自分の部屋へ呼び入れた。兄はいつのまにか持ちこんであった、ティッシュペーパーの空箱を、千枚通しで突きはじめた。ボール紙の箱より薄手のようでも、かなり抵抗感がある。それを力をこめて突き刺した。弟と交代した。弟も、力をこめて千枚通しをティッシュペーパーの箱に突き刺した。

少年が描いている〈少年都市〉の主人公は〈タロー〉という。少年たちが焚火を囲んで語り合う場面で、炎に顔の半分を照らされた主人公が語る。「僕は父を尊敬していた。今でも尊敬している」。場面は回想シーンになる。横顔の父親が白い机に向かって仕事をしている。その大きな机の上には、少年の小さな机の上と同じように、ペン皿、ポスターカラー、三角定規などのデザイン用具類。どこか都心の高層ビルであるらしく、背景には向い側のビル群が見える。「父が仕事をしているそばで、世界地図を描き写している時が、僕が一番しあわせな時間だった」

そして場面は廃墟となる。

前面に〈ムヒョー・ジョー氏〉が登場し、「ムム……」と言う。

風が鳴り、カサカサと音をたてて枯葉が路地を走っていった。母親は、蒲団をもう一枚ずつ掛けてあげようと、少年たちの部屋へ行った。

兄シミジミ少年の部屋はからっぽだった。ベッドのネジを抜いて壊してしまったために、畳の上に蒲団を敷いて寝ているホトホト少年の、隣の部屋のドアを開けると、真っ暗である。

突然、真っ暗な部屋に、ぼたん雪のような光が舞いはじめた。彼女はめまいしそうになり、立ちすくんだ。

「きれい。これ、なあに」

「プラネタリウム。お兄ちゃんが作ってくれたの」

兄はティッシュペーパーの空箱に小さな穴をたくさんあけ、中に懐中電灯を入れて、ゆっくり回していた。兄弟は四角い部屋の底に蒲団を二つ並べ、仰向けになって天井を見上げていた。

彼女はしばらく少年たちの枕もとに坐って、天井と壁と星を見ていた。懐中電灯と星穴との焦点距離や、動かし方によるのか、光は小さなはつきりした星になったり、星雲のようにぼやけたり、流れる星のようになったりした。

「きれいね」

「きれいだね」

「お母さんも今夜はここに寝よう」

ドアをびったり閉ざすと、外からの明りはどこからも入ってこない真暗闇になった。彼女は手さぐりで、二人の少年の間にもぐりこんだ。

暗黒は天井や壁の距離を消し、その中に浮かぶ光の点々は、果てしない宇宙空間の何億光年の距離をつくりだした。

現実の世界の中に切り取られた箱型の宇宙の底に、三人は仰向けに横たわっていた。天もなく、地もなく、涯もない、広漠とした宇宙空間。「アア」と声をだせば、それはどこまでも細い細い糸を引いて、無限の闇の広がりのかたに吸いこまれていきそうだ。

腕を伸ばしても何にも触れず、返ってくるもののない暗黒空間に、三人は浮遊しはじめていた。星がゆつくりと回りはじめた。三人はその中心にむかって漂いながら、だんだん、だんだん小さくなり、極微小の宇宙塵となりつつあった。

アア――

① 彼女の声が、細い細い糸をひいて、無限の闇の広がりのかたに消えていった。それは哀しみの声ではなく、ひそかな歓びの声のようでもあった。

【問1】

① 「鏡にむかって鼻をピクピク動かしてみた。鼻だけを動かすのはむずかしい、顔全体が引きつってしまう、ということを確かめてから、長男シジミの部屋へ入って行った」とありますが、どういうことですか。もっとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 長男の奇妙な鼻の動きをまねしてみることが、長男が香料のにおいの強さを嫌って鼻を動かしているわけではないと気づいて、長男の部屋に入ったということ。

(イ) 頻繁に鼻だけを動かすことは難しいが不可能ではないと思い、長男から鼻だけを動かすための良い方法を教えてもらおうとして、長男の部屋に入ったということ。

(ウ) 目や口などを動かさずに鼻だけを動かすことは困難であることがわかり、長男の癖は育児書で読んだ症状に違いはないと思いながら、長男の部屋に入ったということ。

(エ) 自分も鼻を小さく動かししてみることによって、長男はSF小説の登場人物の動きをまねて鼻を動かしているに過ぎないとわかり、長男の部屋に入ったということ。

【問2】——②『むずかしい年頃の少年め』とありますが、この発言から分かる母親の思いとしてもっとも適当なものを次の

中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 母親は、急に成長した長男にびっくりするとともに、長男が長男らしく弟を気遣えるようになったことを誇らしく思っている。

(イ) 母親は、長男の横柄な態度にうんざりするとともに、長男が毎晩弟に干渉しては、けんかし始めることを不思議に思っている。

(ウ) 母親は、長男を扱いあぐねているとともに、長男を大切に思っている気持ちをうまく伝えきれないことをもどかく感じている。

(エ) 母親は、幼さの残る長男を頼りなく思うとともに、長男を成長させるきっかけがなかなか見つからないことをじれったく感じている。

【問3】——③『白い坐り机の上だけは、きちんと整頓されていた』とありますが、どういうことを示していますか。もっとも

適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 少年は、白い机の上で漫画を描いているときにはいつも、一人前の漫画家になることが貴重な仕事道具を譲ってくれた父親の期待に応えることだと考えている。また、父親の道具を心を込めて大切に扱っていれば、父親は帰宅した際にきつと喜んでくれるだろうと少年は信じているのである。

(イ) 父親も仕事場では白い机を使っており、さらにはデザイン用の文房具や父親からもらった漫画制作に使う用紙などは、少年にとってはあまり家に帰ってこない父親とのつながりを感じられるものである。そのため、白い机およびその上に置いてあるものには、少年は愛着を感じているのである。

(ウ) 父親は仕事場の白い机をいつもきれいにしており、漫画制作用の文房具も机上にきちんとそろえていたことを少年は知っている。それゆえに、父親と同様に白い机を整頓しておくことで、漫画家になる心構えができていることを父親が理解してくれるのではないかと少年は期待しているのである。

(エ) 少年にとって白い机は、家族を捨てようとしている父親も使っているものだから、父親のことばかり思い出し、自身の孤独感を増大させるものである。しかし、白い机やその上に置いてあるものを整えれば、父親に対する気持ちの整理もつけられるのではないかと少年は真剣に考えているのである。

【問4】——④『「少年都市」とありますが、この漫画の内容として適当でないものを1つ選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 核戦争後に生き残った少年たちが新しい都市を建設しようとする物語であり、大人は一人だけしか登場しない。

(イ) 人間社会が崩壊したあとの廃墟のような野原で、何人もの裸の人間がカプセルに閉じ込められて浮遊している。

(ウ) 登場人物のうち最年少は「小丸」であり、彼が大事にしているボタンをなくすと少年たちは一緒に探してくれる。

(エ) 主人公の父親は、都心の高層ビルにある部屋で、デザイン用具類がそろっている白い机に座って仕事をしている。

【問5】——⑤「都市計画案」とありますが、長男が描いた〈少年都市〉の計画図としてもっとも適当なものを次の中から選び、(ア)

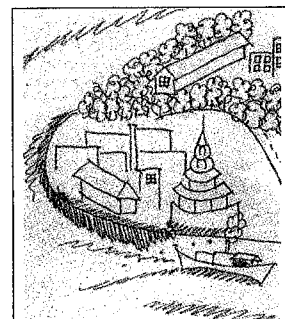
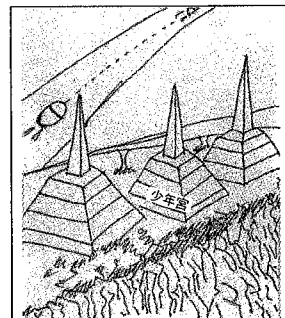
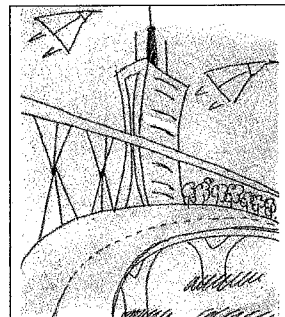
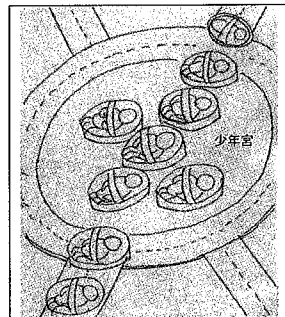
〜(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 第二頁

第三頁

(イ) 第二頁

第三頁

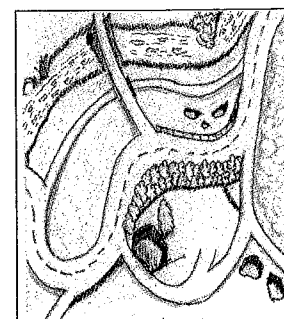
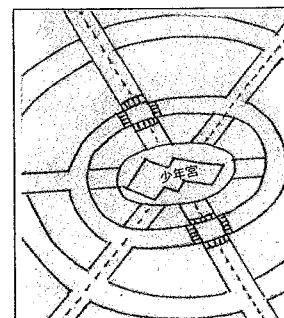
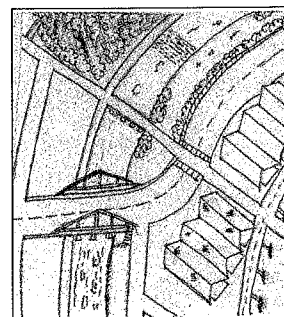
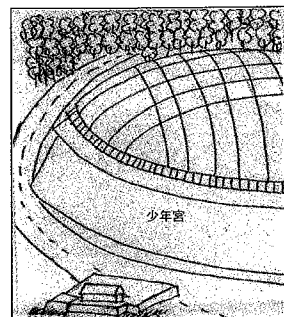


(ウ) 第二頁

第三頁

(エ) 第二頁

第三頁



【問6】

A

B

C

に入る語の組み合わせとして適当なものを次の中から選び、(ア)〜(エ)

の記号で答えなさい。

(ア) AⅡしかし

BⅡあるいは

CⅡもちろん

(イ) AⅡだが

BⅡただし

CⅡたとえば

(ウ) AⅡけれども

BⅡさて

CⅡもつとも

(エ) AⅡそれでも

BⅡおよび

CⅡつまり

【問7】

⑥「このごろ母親は、少年たちの好きな揚げ物料理ばかり作っている」とありますが、これに関する次の説明文の

(1)、(2)について、適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。また、
り抜き出し、はじめの5字を答えなさい。

3

にあてはまる一文を本文中よ

母親は揚げ物料理ばかり作るようになった一方で、魚の煮付けやほうれん草のごま和えを作らなくなった。その理由

の一つは(1)

(ア) 父親のために手間のかかる料理を作っても、当の父親が帰宅しないから
(イ) 家で食事をしないあいだに、父親の食事の好みが変わってしまったから
(ウ) 母親を困らせる子どもたちのために手のこんだ料理を作る気がしないから

である。また、

母親が(2)

(エ) 精神的に不安定な状態にある子どもたちを、食事のときだけでも喜ばせようとしている
(オ) 部屋にこもる内気な長男と、食事のときだけでもコミュニケーションをとろうとしている
(カ) 兄ばかり特別扱いだとひがみ弟を、食事のときだけでも気遣って満足させようとしている

からだとも考えられる。母親は彼らの言動からその気持ちを推し量り、彼らの状態を解消するための方法を懸命に探っているのだ。母親のこうした行動は、「スポック博士の育児書」における
3
という記述を実行に

【問8】

——⑦『お兄ちゃん、あのこと、何かいいアイデア思いついた』とありますが、「あのこと」とはどういうことですか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 父親を喜ばせるための手だて
- (イ) 父親を帰宅させるための方法
- (ウ) ミスターXと父親との対決場面
- (エ) 父親を主人公にした物語の筋書き

【問9】

D には (ア)～(キ) の会話文が入ります。意味が通るように並べ替えた場合、3番目と6番目にあてはまる文を選び、それぞれ記号で答えなさい。

- (ア) 「風の音だろう」
- (イ) 「僕、行かなかった」
- (ウ) 「お父さん、どうしてるかな」
- (エ) 「仕方ないよ。僕たちのために働いてるんだから」
- (オ) 「行こうって言うのに、お前、行かないって拗ねたじゃないか」
- (カ) 「仕事が忙しいんだよ。この前僕がカイシャに泊りに行った時も、夜中の二時まで仕事してたんだぜ」
- (キ) 「だって僕、本当に行きたくなかったんだもん。僕は馳走食べたり、本買ってもらいたくないもん。家で遊んでもらいたい」

【問10】

——⑧「でも思い出っているのは昔のことよ。お父さんは昔の人じゃないでしょう」とありますが、母親のどのような様子を示していますか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 次男は、父親が長男をひいきしていることに気づいたのではないか、だからこそ、父親が家に帰ってくる日を気にしなくなったのではないか、と母親は思っている。そこで、〈おもいで〉にこだわり現実の父親を直視できない次男に対して、「思い出」とは現在の父と次男との関係には影響を及ぼすものではなく、父親はいまも次男のことを愛している、と母親は伝えている。
- (イ) 次男が、父親に親しみを感じなくなっているのではないか、さらには、父親は次男にとって遠い存在となりつつあるのではないか、と母親は心配している。そこで、〈おもいで〉によって父親の愛情の量を判断しようとする次男に対して、「思い出」とは現在の父と次男との関係には影響を及ぼすものではなく、父親はいまも次男のことを愛している、と母親は伝えている。
- (ウ) 次男は、父親がもう二度と家に帰ることはないと思っているのではないか、また、父親を信用できない人間だと思っているのではないか、と母親は不安に思っている。そこで、〈おもいで〉が少ないと父親を悪く言う次男に対して、昔の父親との「思い出」はいくつかあるのだから、今の父親が仕事で忙しくて一緒に遊べなくても気に病むことはない、と母親は伝えている。
- (エ) 次男は、父親に少し怒られたことをいまだに根に持っているのではないか、それゆえ、今後も父親が帰ってこなければいいと思っているのではないか、と母親は感じている。そこで、〈おもいで〉を実感できないことを悲しむ次男に対して、「思い出」とは昔のことであり、仕事が一区切りつければ父親は帰ってくるのだから、父親を恨まないでほしい、と母親は伝えている。

【問11】——⑨「またペテルギウスの赤い星が輝いている」とありますが、どういふことを示していますか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 家族の中でお互いの気持ちをわかり合えるきっかけが生まれつつある、ということ。
- (イ) 少年たちがこれまで願いつづけていたことが今日こそ実現するだろう、ということ。
- (ウ) 父親が不在で不安な気持ちになっている兄弟を空の星が見つめている、ということ。
- (エ) ふだんであれば小さなことをきっかけとした騒ぎが持ちあがるころだ、ということ。

【問12】——⑩「赤い星は物干し台の上に回って、雲の中にかくれた」とありますが、これに関する次の説明文(1)～(6)について、適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

土曜日の夜、母親は夕食の仕度しなぐをしている。兄弟は母親の様子を見ながら、今日こそ父親が帰ってくると期待していた。兄は芋いもを四つ焼き、弟は無関心をよそおってビーズ玉で遊んでいた。今夜は父親は帰って来ないとわかったとき、母親は、(1)

(ア) ビーズで〈父座〉を作って見せながら、兄弟が父親の悪口を言わないようにたしなめた。
(イ) 次男のビーズで〈父座〉を作りながら、父親が帰って来ない理由をさりげなく伝えた。
(ウ) 〈父座〉を作っている次男のビーズを取り上げることで、父親の話題を避けようとした。

兄は、落胆らくたんしている弟をこっそりと自室に呼び、プラネタリウムを作った。プラネタリウムを作る過程で、二人はティッシュペーパーの空箱に千枚通しで穴を開けた。その時、兄は力をこめた。兄のこうした行動には、

(2)

(エ) 約束を簡単に破る父親に何を期待しても仕方ないという思い
(オ) 幼い弟の気持ちを傷つけても平然としている父親に対する怒り
(カ) 父親が帰宅するという期待が裏切られた寂しさ、やりきれなさ

が示されている。また、力を込めて穴を開ける場面には、(3)

(キ) あらゆる感情を押し殺そうとしている
(ク) はりつめた感情を解き放とうとしている
(ケ) 満たされない気持ちを扱いあぐねている

様子が示されている。兄はこの作業を、ほどなくして弟と交代している。その態度には、

(4)

(コ) 同じ作業をさせることで、弟の沈んだ気持ちを和らげようという兄の気配り
(サ) 同じ作業に飽きてきたので、残りの作業は弟に押しつけようとする兄の考え
(シ) 同じ作業をすることで、父親への怒りを弟と共有しようとする兄の仲間意識

が感じられる。

このあと、兄弟は弟の部屋に移動して、二人で布団ふとんに仰向けあおむけに寝る。彼らが弟の部屋に移動した理由は、

(5)

(ス) 弟の部屋は兄の部屋よりも広いので、弟の部屋で寝ていれば、母親も一緒に布団で寝てくれるだろう
(セ) 弟のベッドは片づけやすく、部屋には布団をすぐ敷けるうえ、弟の部屋の天井は兄の部屋のそれより
(ソ) 弟は布団で寝ており、布団で仰向けになる方が、天井の高い場所に懐中電灯で作られる星を見ることが

思ったからだ
も高かったからだ
ができるからだ

。いつしか、赤い星は雲に隠れている。(6)

(タ) 長男にとつても、自作の漫画の中で父親
(チ) 母親にとつても、一人でゆつたりとくつ
(ツ) 兄弟にとつても、ふだんの夜と異なり、

と決別する時がきたのである
ろげる時間帯となったのである
平和な時間が流れているのである

。ビーズの星々とは異なり、二人が作ったプラネタリウムには〈父座〉はない。

〈父座〉のない家の天井や壁に、プラネタリウムは明るい星々を映すのだ。

【問13】

①「彼女の声^{かお}が、細い細い糸をひいて、無限の闇^{やみ}の広がりのかたに消えていった。それは哀^{かな}しみの声ではなく、ひそかな歓^{よろこ}びの声のようでもあった」とありますが、これに関する次の説明文の(1)～(4)について、適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

母親は、プラネタリウムが作る光に誘^{さそ}われて兄弟のあいだで眠^{ねむ}ることを決める。暗闇^{くらやみ}に横たわった三人は、宇宙空間に浮遊^{ふゆう}しているかのようなのである。ある空間を人が浮遊しているイメージは、長男が読んでいた漫画(メチル・メタフィジーク)にもあった。漫画では、ばらばらに浮遊していたが、三人はいま一人ではなく〈家族〉で浮遊している。この情景が、最後の場面につながる理由を考えてみよう。

三人は、父親が家に帰宅しないという事態に対してそれぞれに不安を覚えている。長男は父親と過ごした時間があるからこそ、父親がいないことに寂^{さび}しさを感じていると言えらるだろう。しかしながら、その寂しさは表にはあまり出てこない。むしろ(1)

- (ア) 父親は自分たちのために懸命^{けんめい}に働いてくれているのだ
(イ) 父親は家族と過ごす時間がわずらわしくなっているのだ
(ウ) 父親はまだ幼い弟がまとわりつくことを嫌^{きら}っているのだ
- と考え、自分の寂しさを押^お

し殺^{ころ}そうとするのである。次男は、(2)

(エ) 父親と一緒に遊びたい年ごろ
(オ) 父親に反発心を覚える年ごろ

だが、漠然^{ぼくぜん}とした不安を抱いてい

る。一方、母親も、(3)

(キ) 現状への不満を時折口に出すこともあるが、子どもたちには優しい母親として接す
(ク) 現状への不満を子どもには見せないが、様々に不安を抱える子どもたちと一人で向

ることができている状況^{じょうきょう}に満足を感じているのであり、帰宅しない夫を恨^{うら}んでいるわけではない
き合わなければならない状況に負担を感じており、帰宅しない夫に対して実際は不満を感じている
なり、争いごとが増えていく状況に危機感を感じており、本心では夫が毎日帰宅することを望んでいる

。また、
今後父親が家に帰ってこなくなった場合の、家庭の状況に不安を覚えている。

三者三様の不安は、暗闇に漂^{たふ}いながら、宇宙の塵^{ちり}となりつつある。そのとき母親から「ひそかな歓びの声」のようなものが聞こえてくる。母親にとって、現状の〈家族〉は、家族のあるべき姿からはほど遠いものであり、三人で作る〈家族〉は、父親から切り離^{はな}されて浮遊している感覚の内にあると言えるだろう。

しかし、久しぶりに仲良くなった兄弟が、ともに制作したプラネタリウムに、母の不安をかき立てるものはない。プラネタリウムは、長男と次男、さらには母親の孤独の形を融和^{ゆうわ}させ、それは宇宙の塵^{ちり}となり、暗闇に吸^すい込まれていく。そのとき、かみ合わないことばかり続いた三人の〈家族〉に、一つの可能性が生まれるのである。母親の声ともつかない声がひそかな歓^{よろこ}びの声のように聞こえるのは、ここで母親が、

(4) (コ) 不安定な現実からいつの日か逃避^{とうひ}できる可能性
 (サ) 不安定な現実が^{ふく}含む未来へ反転する可能性
 (シ) 不安定な現実を改善する必要を感じないですむ可能性
 を感じていることを暗示しているからだ。
 つまり、このときかろうじて、これまで否定的に考えざるを得なかった〈家族〉は肯定^{こうてい}されるのである。ここで母親から発せられた「アア」という声は、この〈家族〉の未来における可能性を示しているにすぎないからこそ、まだ言葉にはならない声なのである。

【出典】

- 〔Ⅰ〕 湯嶋健「蜜蜂・人間・ゴキブリ―人間は虫になれるか―」『図書』（一九七三年七月号）より。
 〔Ⅱ〕 千刈あがた「プラネタリウム」『千刈あがたの世界―樹下の家族』（河出書房新社、一九九八年）より。

I

問 1	問 2	問 6	問 10	問 11
問 1 a b c d e	問 2 A C	問 6	問 10 一 a b c d e 二 (1) (2)	問 11 (一) (二)
	問 3	問 7	問 12	
	問 4	問 8 (5) (6) (9)		
	問 5	問 9		
	問 1 a b c d e			

II

問 1	問 2	問 6	問 12
問 1	問 2	問 6	問 12 (1) (2) (3) (4) (5) (6)
問 3	問 7 (1) (2) (3)	問 8	問 9 3番目 6番目
問 4	問 10	問 11	問 13 (1) (2) (3) (4)
問 5			

成績記入欄

受験番号

氏名